

報 告

アートワークを通じた子どものレジリエンスの促進 —児童養護施設の小学校低学年の子どもを対象としたグループ活動の検討—

三谷 英子¹⁾, 古荘 純一²⁾

〔論文要旨〕

アートワークが児童養護施設で生活している小学校低学年の子どものレジリエンスを促進するかグループ活動を実施し検討した。効果評価は、アートワークによるグループ活動時の行動観察並びにエピソードによる評価とケアワーカーと対象児への質問紙調査を行い、①対人関係、②自尊感情、③自己効力感、④ストレスの軽減、といったレジリエンスの内的要因の変化を総合的に検討した。活動の結果、①信頼関係の構築、②自尊感情の高まり、③自己効力感の顕示、④心身の状態の軽快などの肯定的変化が確認された。アートワークを通じたグループ活動は、レジリエンスの促進に効果があると考えられた。

Key words：レジリエンス、アートワーク、グループ活動、児童養護施設、小学校低学年

I. はじめに

近年、わが国においては、レジリエンス (resilience) の概念が心理、保健、福祉などの分野において認識されつつある。この言葉は、回復する力、立ち直る力などと訳され、Gilligan は、要保護児童分野においてのレジリエンスの意義を強調している¹⁾。レジリエンスは、リスクの存在や重大な逆境による困難に直面しストレスや葛藤のある状況にもかかわらず、社会的に良好な状態を維持し適応的な生活が送れる力、精神的に乗り越える力などと定義されている²⁾。レジリエンスを支える保護要因 (protective factors) には、学力、楽観主義、自尊感情、自己効力感、ストレスに対処する力などの個人の特性としての内的要因 (internal factors) と、支援者との信頼関係の構築、学校の先生や友だちとのつながり、余暇時間における経験などの社会的資源から得られる外的要因 (external factors)

との複合的な相互作用が影響するといわれている³⁾。

これまでの児童養護施設 (以下、施設) で生活している子どもを対象とした個別による取り組みには、個々の課題の修正を目的とした環境療法と⁴⁾、トラウマからの回復を目的としたプレイセラピー⁵⁾の二つの側面からのアプローチを併用する方法が提案されている。また、グループによる取り組みには、小学生を対象に生活指導員 (care worker : CW) とのソーシャルスキルの取得を目的としたプログラムなどがある⁶⁾。これらの取り組みは言語によるアプローチであるが、武井は子どもは言葉で心の中の複雑な感情や考えを表現する能力が成人ほど十分に発達していないため、不快な感情を表現しきれずにストレス反応として情緒、身体、行動の問題としてさまざまな症状を出現しやすいと指摘している^{7,8)}。このような子どもの特徴に加え、施設で生活している子どもは「虐待経験あり」、「障害等あり」の占める割合が高く⁹⁾、これまでの経験や障

Enhancing Resilience in Children through the Art-work

— Study of Group Activities for Lower Grades of Elementary School Children in Children's Home —

Hideko MITANI, Junichi FURUSHO

1) 社会福祉法人川崎愛児園 (心理職 / 専門健康心理士)

2) 青山学院大学大学院教育人間科学研究科 (教授 / 医師 / 小児科)

別刷請求先：三谷英子 e-mail : mitani2650@yahoo.co.jp

[2577]

受付 13.11.12

採用 14.11.28

害等により言葉で自分の快・不快の感情を表現することが苦手な場合がある。このような状況を踏まえ、施設での子ども支援は、言語によるアプローチだけでなく、非言語的な媒体を用いたアプローチを導入することは重要と考える。

筆者はこれまでに非言語的なアプローチとしてアートワーク (art-work) を通じたグループ活動の実証検討を行い、そのうちの小学4年生1名、5年生1名の2事例について報告した^{10,11)}。本研究のアートワークとは、リジリエンスを促進することを目的とし、絵画、コラージュ、造形などの視覚的アート (visual arts) を用いた自由表現による創作的活動を通じて内的要因を促す支援法とした。なお、先述したように内的要因には諸要因が示されているため^{1~3)}、本研究では、①対人関係 (他者との信頼関係の構築)、②自尊心感情 (自己を肯定し自分はこれでいいという感覚)、③自己効力感 (達成感を積み上げできそうだからやろうという感覚)、④ストレスの軽減 (心の状態の浄化作用) の因子4項目とした。

美術分野の一つである視覚的アートは、医療、福祉、心理などの領域現場において創作的 (芸術的) 活動、表現活動および芸術療法として精神科の病院、デイケアなどで実践されてきた¹²⁾。視覚的アートは、リハビリテーション^{13,14)}や虐待を受けた子ども¹⁵⁾へも適用されており、施設の子どもの対象に「尊重を大切にする」ことを目的としたグループケアの報告もある¹⁶⁾。一方、絵画表現を理解し投影する方法として、家―樹木―人物画法 (HTP テスト)、樹木描画法 (バウムテスト)、コラージュ療法などがある。投映法を用いる場合は、対象者の理解や治療の進展を促すために導入されているが、表現されたものから投影的、構成的表象を解釈するため専門分野でのトレーニングが必要になる¹²⁾。

施設で生活している子どもへの創作的な表現活動を導入した報告は本邦では少なく、特に、対象を小学校低学年の子ども、実施形態をグループ活動、とした報告はほとんどない。このような背景から、本研究では、施設で生活している小学校低学年の子どもにアートワークによるグループ活動を実施し、リジリエンスにどのような変化が表れるか検討した。

表1 対象者の概要

メンバー	学年	児童養護施設 入所以前の施設養護 の経験	被虐待経験	心身の状況
グループ1				
A	1年	乳児院	ネグレクト	ADHD、挑戦的、攻撃的な行動、特別支援級
B	1年	乳児院	ネグレクト	広汎性発達障害、多動・衝動・不注意、習癖、通級
C	1年	乳児院	ネグレクト	打解けない、言語表現が苦手、習癖
D	2年	乳児院	ネグレクト	情緒の問題、習癖、特別支援級
E*	2年	なし	身体的・心理的虐待	打解けない
グループ2				
F	1年	乳児院	心理的虐待・ネグレクト	多動・衝動・不注意、情緒の問題、習癖、特別支援級
G	1年	なし	心理的虐待・ネグレクト	軽度知的障害、特別支援級
H	1年	乳児院	ネグレクト	打解けない、言語発達の遅れ
I*	1年	なし	身体的・心理的・性的虐待・ネグレクト	挑戦的、攻撃的な行動
J*	2年	なし	心理的虐待・ネグレクト	打解けない

*：途中から週末は帰宅するようになり全期間は参加できず。

II. 研究 方 法

1. 対象の選定

対象者の選定は、2011年4月に施設で開かれた子ども集会において、アートワークの概要説明を紙芝居形式で行った。その場で質問紙を配布し「参加・不参加」の意思を確認し集計した。参加する子どもは、グループ1は小学1年生3名と2年生2名の計5名、グループ2は小学1年生4名と2年生1名の計5名とした(表1)。

2. アートワークの方法

i. 研究期間

期間は、第1期:支援1(アートワーク導入)2011年6~7月までの毎週1回土曜日全8回(2か月)、3か月後に、第2期:支援2(フォローアップワークⅠ)2011年11月~2011+1年3月までの毎月第1日曜日全5回(5か月)、第3期:支援3(フォローアップワークⅡ)2011+1年4~8月までの毎月第1日曜日全5回(5か月)、計3期を設定した。

ii. 実施場所および作業形態

場所は施設の学習室で行い、作業形態は1回90分程度を設定しグループ内で個人制作を行った。同時に実施者である筆者(以下、メンター(mentor)(支援者))1名とアシスタント1名も制作した。場の設定は、子どもはテーブルを囲んで座り、メンターたちは自由に移動しながら子どもへの対応を行った。

iii. アートワークの枠組み

枠組みは、(1)アートワーク開始時の導入として、毎回の目標(時間内に一つの作品を完成させよう)、今日の課題(内容)、材料の説明、終了時間の提示を行う、(2)制作スタート、(3)作品の完成、作品の題名の発表、(4)次回の日程の確認、(5)みんなで後片付け、である。

iv. プログラムについて

アートワークのプログラムは、絵画、コラージュ、造形などの視覚的アートを取り入れた内容をメンターが構成した(表2)。題目は、“今日の課題”として題目を提示し、個々の子どもがその題目からイメージし

表2 アートワークのプログラム

回	今日の課題	表現方法	作業形態/実施
第1期:支援1(アートワーク導入)			
#1	「色遊びひっかき表現」	絵画	個人/グループ
#2	「自分のエコバッグを作ろう」	絵画・コラージュ	個人/グループ
#3	「びっくり紙コップ&糸電話に絵を描こう」	絵画・造形	個人/グループ
#5	「カレンダー作り」	絵画・コラージュ	個人/グループ
#6	「牛乳パックでモビール作り」	絵画・コラージュ・造形	個人/グループ
#7	「簡単な形から表現をつなげていこう」	絵画・コラージュ	個人/グループ
#8	「うちわで応援グッズ制作」施設行事	絵画・コラージュ	個人/グループ
第2期:支援2(フォローアップワークⅠ)			
#1	「フェルトで版画」	絵画・版画	個人/グループ
#2	「クリスマスリースを作ろう」季節行事	コラージュ・造形	個人/グループ
#3	「紙粘土で自画像を作ろう」 絵画展出張制作	絵画・造形	個人/グループ
#4	「人・木・家を入れて自分のこころの 風景制作」	絵画・コラージュ	個人/グループ
#5	「大きな段ボールに切り絵を貼ろう」	切り絵・コラージュ	個人/グループ (一つの段ボールに みんなで貼る)
第3期:支援3(フォローアップワークⅡ)			
#1	「大きなコピー写真に色を塗ろう」	色塗り	個人/グループ
#2	「牛乳パックで動く車づくり」	コラージュ・造形	個人/グループ
#3	「自分の海」絵画展出張制作	絵画	個人/グループ

たことを自由に制作した。材料は、テーブルの中央に配置した。

v. アートワークに含まれる4つの要素

アートワークのプロセスには、(1) 自己の能力の活用、(2) 他者との「共有・共感」体験の積み重ね、(3) 表現を通じたコミュニケーションの促進とカタルシス効果（心の浄化作用）、(4) 子どものストレングス（強み）に視点を向けた肯定的なメンターの対応、の4つの要素が含まれていると想定している^{10,11)}。

3. 効果評価および分析方法

効果評価および分析方法は下記の指標を用いて、対人関係、自尊感情、自己効力感、ストレスの軽減、を総合的に検討した。

i. 表現された作品について

アートワークでは、制作された作品を次のように考える。(1) 作品は心理的問題背景を探す要素としてのみ観るのではなく、作品の表現描写そのものの良さや特徴を見つけ、子どもと一緒に楽しみ、ほめる要素として捉える。(2) 作品の題名、作品に関する子ども自身の語る言葉(感想)が本当のことであると捉える。(3) 視覚的に気になる表現、例えば感情的、性的な描写などが表出している場合は、子どもに確認し、CWと情報交換を行いケアや支援の足掛かりとする。

ii. 行動観察とエピソード記述

メンターはアートワークに関与しながら行動観察を行い、同時に、ICレコーダーで会話を録音しエピソード記述を行った。

表3 CWによる施設内行動評価 グループ1および2

	経過／項目	健康度	遊び	対人関係	問題行動	抑うつ感	自律神経系 関連	自傷行為
A	第1期前	20	12	69	2	5	0	0
	第1期後	20	14	60	0	0	0	0
	第2期	20	14	60	0	0	0	0
	第3期	22	15	58	0	0	0	0
B	第1期前	18	16	38	1	0	4	2
	第1期後	18	20	20	0	0	3	1
	第2期	18	20	20	0	0	3	0
	第3期	18	20	20	0	0	3	0
C	第1期前	26	7	30	0	5	0	0
	第1期後	38	7	16	0	3	0	0
	第2期	38	7	16	0	2	0	0
	第3期	38	7	16	0	2	0	0
D	第1期前	19	13	45	1	4	2	1
	第1期後	22	18	41	0	1	0	0
	第2期	22	21	39	0	0	0	0
	第3期	22	21	32	0	0	0	0
F	第1期前	21	13	40	1	1	2	0
	第1期後	22	15	38	1	0	0	0
	第2期	30	21	34	1	0	0	0
	第3期	33	21	32	0	0	0	0
G	第1期前	21	11	6	0	0	0	0
	第1期後	22	14	1	0	0	0	0
	第2期	22	14	1	0	0	0	0
	第3期	24	15	0	0	0	0	0
H	第1期前	30	8	44	0	2	2	0
	第1期後	39	9	42	0	0	0	0
	第2期	39	9	42	0	2	2	0
	第3期	39	11	38	0	0	0	0

10項目群のうち7項目群で課題が示された。
「健康度」、「遊び」の項目は点数が高いほど良好と示す。他項目は点数が低くなるほど良好と示す。

iii. 質問紙法の調査内容

a. 施設内行動観察チェックリスト¹⁷⁾

質問紙法による調査は、第1期介入開始前と介入全終了後、第2期介入開始前、第3期介入全終了後、に担当のCWに質問紙への記入を依頼し後日回収した。行動観察の項目群は、「健康度(21)」、「遊び(7)」、「対人関係の問題(28)」、「認知・学習の問題(15)」、「問題行動(16)」、「抑うつ感(5)」、「自律神経系関連の問題(5)」、「睡眠の問題(5)」、「多動・衝動・注意(5)」、「自傷行為(3)」の10項目群(カッコ内の数字は項目数を示す)に分かれ、質問数は計110項目である。各項目の点数化は、「全くみられない(不明含む)」0点～「いつもみられる」3点の4件法である。各項目群には、「問題群」、「準問題群」の点数が定められている。「健康度」と「遊び」の各項目群は、肯定的な点数計算になり合計点が高いほど良好であることを示し、「対人関係の問題」～「自傷行為」の各項目群は、合計点が高いほど問題が深刻であることを示す。

b. 自尊感情尺度¹⁸⁾

質問紙法による調査は、第1期介入開始前と介入全終了後、第2期アートワーク#1と第3期アートワーク#5の事前に個々の子どもに行った。質問数は9項目あり、項目の点数化は、逆転項目はなく「はい」4点～「いいえ」1点の4件法である。項目の点数を合計するため得点分布は9～36点となる。合計点が高いほど自尊感情が高いことが示される。

c. 気分評価(フェイススケール)¹⁹⁾

質問紙法による調査は、第1期アートワーク#5、第2期アートワーク#1、第3期アートワーク#1の事前と事後に個々の子どもに行った。気分評価は、気分の異なった顔5つ「すごく楽しい」～「ぜんぜん楽しくない」の表情が並んでいる。その中から、あてはまる気分の顔を1つ選んでもらう。評価方法は、事前と事後の気分の移行を評価する。「すごく楽しい」、「楽しい」は良好な気分、「ふつう」は安定、「楽しくない」、「ぜんぜん楽しくない」は不良な気分と評価する。

d. アートワーク振り返りシート

質問紙法による調査は、第1期アートワーク#7、第2期アートワーク#5、第3期アートワーク#4の事後に行い、メンターが質問9項目を読み上げ「はい」の場合は挙手し、「いいえ」の場合は挙手しないと示した。表3に示した数値は「はい」と挙手した人数である。振り返りシートの作成は、標準化された振り返りシ-

ートを参考にアートワーク用に作成した²⁰⁾。なお、自己効力感の評価については、ii. およびiii. d. を検討した。

4. 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、2011年2月に施設長と施設職員に研究計画書を提出し書面による承諾を得た。2011年4月に子どもたちにアートワークの参加意思を確認した。プライバシー配慮のため子どもの氏名等は変更している。なお、本研究は2011年5月に社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所の倫理委員会により承認を得た。

III. 結 果

ここでは内的要因として、対人関係、自尊感情、自己効力感、ストレスの軽減、のそれぞれの因子から全期間に参加できた計7名について述べた。

1. 対人関係

第1期介入開始前にCWによる施設内行動評価を行ったところ「対人関係の問題」の項目群は7名において問題が示された(表3)。本研究の第1期前半の活動時において個人差はあるがメンターまたはメンバーに対して、ちょっとしたことで苛立つ、挑発的、攻撃的、威圧的、打ち解けないなどの言動が頻繁に表出した。第1期介入終了後は7名が「対人関係の問題」の項目群の得点が低くなった。第2期は6名が第1期介入終了後と得点の変動はなく1名の得点が低くなった。第3期は4名が第2期よりも得点が低くなり2名は変動がなく1名が消失した。第1期前半の活動時に表出していたさまざまな言動は、第1期中盤から段階的に表出頻度が軽減し、第2期および第3期にはそれらの言動が目立たなくなった。

2. 自尊感情

7名の各期における自尊感情尺度は、介入前は29.0±6.0(平均±標準偏差)、第1期介入後は32.6±4.6、第2期は32.6±4.6、第3期は33.7±2.7と上昇した。個々の変化については個人差があり第1期介入後に速やかに上昇するものと、第3期にかけて徐々に上昇するものがあったが、全員が上昇し安定した。

3. 自己効力感

本研究の第1期前半では、制作過程において、「むり」、「できない」などの消極的な言葉を発する場面がみられたが、第1期中盤からは、「やってみたい」、「これどうやるの」などの意欲的な言葉を発するようになった。第2期および第3期では、入室すると、「今日は何やるの」という意欲的な言葉が先行し、制作過程においてもメンターに、「これ見て」、「これいいでしょ」、「できたよ」などと作品についての自信や積極的な言語表現が増えた。作品の完成についても、第1期前半では集中できずに作品を完成できない子どもがみられたが、第1期中盤からは作品制作に積極的に取り組み集中する時間が長くなり、出席した回には、必ず作品を完成するようになった。アートワーク振り返りシートの経過は、グループ1は振り返り項目が改善し、グループ2は全期において良好と答えた。2グループの子ども全員は、終始「またやりたい」と答えた(表4)。

4. ストレスの軽減

所定のフェイスシートによる事前調査では、B, C, D, Fの4名がストレス反応と思われる身体をいじる習癖(指しゃぶり、性器いじり)や日常生活習慣に関する習癖(夜尿)が指摘された(表1)。本研究の第1期の活動時においてこの4名は、何らかの外的な刺激をきっかけに内面に感情を押し留めると同時に、無

意識に身体をいじる習癖が出現し、A, C, D, F, Hの5名は、苛立ち、他者に対しての攻撃性、打ち解けないなどの情緒や行動面に関する状態を表出した。全期介入後にCWは次の子どもの症状の変化を指摘した。①指しゃぶりがあったCは消失し、Fは段階的に頻度が軽減した。②性器いじりのあったCは消失した。③夜尿があったDとFは頻度が軽減しBは変化がなかった。④他者に対しての苛立ちと攻撃性がみられたAとD、情緒の不安定さがみられたAとDおよびF、打ち解けない状態がみられたCとHは、段階的に状態が軽減した。CWによる施設内行動評価では、「健康度」、「遊び」は7名が高くなった。「抑うつ感」があったA, C, D, F, Hの5名のうち4名は状態が消失し1名は軽減した。「自傷行為」があったB, Dの2名は状態が消失した(表3)。本研究の第1期の活動時において身体をいじる習癖があった4名、情緒や行動面に課題があった5名は、段階的にそれらの表出頻度が軽減した。アートワーク振り返りシートでは、グループ1は振り返り項目が改善し、グループ2は全期において良好と答えた(表4)。気分評価の結果は、第1期は5名が好転し2名は安定、第2期は4名が好転し3名は安定、第3期は1名が好転し6名は安定となり、アートワークの事後は良好な気分の変化を示した(表5)。

表4 アートワーク振り返りシート

質問項目	第1期		第2期		第3期	
	グループ1	グループ2	グループ1*	グループ2	グループ1	グループ2
1 おもったように つくれましたか	2	3	2	3	4	3
2 たのしく とりくめましたか	2	3	3	3	4	3
3 あっというまに おわりの じかんが きましたか	2	3	3	3	4	3
4 いっしょうけんめいに とりくめましたか	3	3	3	3	4	3
5 さいごまで あきらめないで がんばれましたか	2	3	3	3	4	3
6 じぶんの さくひんをみて いいなあと おもいましたか	3	3	3	3	4	3
7 みんなで たのしめましたか	2	3	3	3	4	3
8 アートワークにきて ほっとしましたか	2	3	2	3	4	3
9 また やりたいですか	4	3	3	3	4	3

グループ1は全4名、グループ2は全3名、「はい」と挙手した人数を提示した。

*は1名欠席した。

表 5 気分の変化

	第 1 期		第 2 期		第 3 期	
グループ1	事前	事後	事前	事後	事前	事後
A	普通	楽しい	楽しい	楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい
B	普通	楽しい	普通	楽しい	楽しい	楽しい
C	普通	すごく楽しい	普通	すごく楽しい	楽しい	楽しい
D	すごく楽しい	すごく楽しい	普通	すごく楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい
グループ2	事前	事後	事前	事後	事前	事後
F	楽しい	すごく楽しい	楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい
G	すごく楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい
H	楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい	すごく楽しい

IV. 考 察

1. 子どもの内的要因の変化

子どもの内的要因の変化として、対人関係、自尊心、自己効力感、ストレスの軽減、について述べた。

i. 対人関係

西澤は、虐待を経験した子どもは対人関係に問題がみられやすいことを指摘し²¹⁾、Johnson は、子どもとのコミュニケーションのきっかけを作る手段として絵を描くことを提案している¹⁵⁾。介入後のCWによる施設内行動評価では「対人関係の問題」が改善した。本研究において子どもたちは、①他者と一緒に作品を制作する楽しさや大変さを体験し、②制作過程の進行に不安が生じた場合はメンターに確認し次の作業を進行し、③表現した作品を他者が興味を持ちほめられる、受けとめられる体験など、肯定的な経験を積み重ね、段階的に他者とのコミュニケーションの深まる関係が築かれ対人関係に良好な影響を及ぼしたと考えられる。

ii. 自尊心

西澤らは、施設に入所している子どもの自尊心は低い傾向があることを指摘し²¹⁾、近藤は、自尊心を育むには他者との比較によって生じる感情ではなく、共有・共感体験の積み重ねにより「このままでよい」という自分自身を受け入れる感情を育むことが大切であると述べている²²⁾。本研究において自尊心の上昇が示されたことは、①制作過程において、「何を描こう」、「何色にしよう」、「どうしよう」などと試行錯誤を重ねながら自分の作品を完成し、「自分は頑張れるんだ」という感覚が得られた、②制作過程において他者に作品について、「すごいね」、「素敵な色だね」、「かっこいいね」などとほめられる、受けとめられる経験を

得たなど、他者との関わりを通じて自己を肯定し受け入れる感覚が得られ自尊感情が高められた、と考える。古荘は、本邦の小学生は低学年ではまだ自尊感情が高く、高学年になるに従って自尊感情が低くなることを報告しているが²⁴⁾、本研究においても低学年のうちに他者との肯定的な関わりを積み重ね子どものストレングス（強み）を支えることは、自尊感情を育めたと考えられる。

iii. 自己効力感

本研究では、Bandura が指摘している達成体験が積み重ねられるように²⁵⁾、毎回の目標を「時間内に一つの作品を完成させる」と設定した。本研究において2グループの子ども全員は、段階的に必ず作品を完成することができ、活動時に積極的な言語表現が増え、振り返りにおいても終始「またやりたい」と答えた。このような良好な経過は、①自分以外の他者の制作過程を観察し「自分にもできそうだからやろう」という感覚が得られ、②他者から自分の作品をほめられる、受けとめられる経験を重ねるなど、次の行動を引き起こす意欲が促された、と考えられる。

iv. ストレスの軽減

栗山は、子どもは心身が未熟で未分化なため、ストレス反応が身体症状として出現しやすく、心理的要因が身体疾患の症状の消長へ影響しやすいと指摘している⁸⁾。本研究の活動時においても子どもたちは、ストレス反応と思われる習癖や情緒および行動面に不安定さを確認したが、全期介入後ではそれらの諸症状が軽減し良好な変化が示され、CW の施設内行動評価においても、「健康度」、「遊び」などの項目群において良好な変化が示された。また、介入後の気分評価においても、気分の良好な変化が示された。これらの良好な経過は、活動時に内的な思いを自由に好きな色や形で

表現し、快や不快の喜怒哀楽の感情を言葉で表出することで自分の欲求が満たされたことが関連したと考えられる。中道は、日常生活の場面で起きた出来事や感情を内面に留めずに作品と言葉の両方で表出することは、心身の緊張が解かれカタルシス効果が得られストレスの軽減が起こるとしている¹³⁾。また、山田は、自分が楽しいと思うことを信頼している人たちと一緒に話し合いだけでも、ストレスの軽減が得られるとしている²⁶⁾。

以上のように、レジリエンスを促進する4因子から考察し、本研究のアートワークは、小学校低学年の子どもの内的要因に良好な変化を及ぼしレジリエンスを促進することが可能であることが示された。

2. グループ活動の有効性

先述したように、本邦では施設で生活している小学校低学年を対象としたアートワークによるグループ活動の報告はまだ少なく、近藤の報告¹⁶⁾と、筆者らの報告のみである^{10,11)}。

本研究におけるグループ活動は、①他者を観察し「自分もやりたい」、「自分もできる」という感覚が得られ、②作品を制作する大変さや楽しさを共有するなど、他者が存在することで相互作用が得られた、と考える。近藤は、他者との多様な感情を共有する機会は自尊感情の形成に大きな役割を果たすと指摘し²²⁾、Banduraは、他者が存在することで自己効力感が育まれるとしている²⁵⁾。当初、グループ1は、攻撃的、威圧的な子どもの存在で、その刺激により他児にネガティブな感覚が生じた。グループ2は、意欲的に制作に取り組む子どもが存在し制作に取り組めない子どもが存在してもメンバーが「大丈夫」と声掛けをしてお互いを支え合えた。このようにグループ活動はメンバー間において、具体的に他者に何かを働きかけたり、働きかけられたりする行動や、互いに助け合い協力し合おうといった感情が体験を通じて起こりやすいと考える。しかし、グループ活動は、人間関係上の問題も容易に表出することから、子どもが心地良く一緒に時間を過ごせる体験が得られるようにメンターの十分な配慮が必要であると考えられる。

V. 結 論

施設における子ども支援は、さまざまな専門分野で研究が行われている。しかしそれらの支援は、心理・

医学的な高い専門性が求められるため、CWがそれらの技能を取得するために研修を受け、さらに時間を割いてそのプログラムを実施するには、現在の施設の運営形態および人員配置では、人的制約や時間の問題が重なりCWへの負担が生じうると考える。アートワークは、必ずしも高い専門性を必要としないため、機関、ボランティアなどの社会的資源を有効に活用する形態で十分に実施が可能である。また、非言語的なアプローチは、子どもに無理のないコミュニケーションのきっかけとなり、グループで施行できるため小集団における自然な子どもの状況を把握することが可能になる。今回は、対象が7例であったため有意差検定は行わず、質問紙等から介入後の個々の子どもの変化を示した。今後は、症例を増やし統計的な処理も踏まえて分析および介入を行っていきたい。

謝 辞

本研究の実施にあたり快く許可を頂きました児童養護施設の施設長、およびご多忙のところ質問紙調査等にご協力頂きました職員の方々、アートワークに参加してくれた子どもたちに心より御礼申し上げます。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) Gilligan R. Promoting Resilience. British Association for Adoption & Fostering, 2009 : 47-100.
- 2) Masten AS, Best K, Garmezy N. Resilience and development : Contributions from the study of children who overcome adversity. Development and Psychopathology 1990 ; 2 (4) : 425-444.
- 3) Fraser MW, Kirby LD, Smokowski PR. Risk and resilience in childhood. Edited by Fraser MW. Risk and Resilience in Childhood : an ecological perspective. NASW Press, 2004 : 13-66.
- 4) 西澤 哲. 虐待の心理的影響と子どもの心理療法. 小児の精神と神経 1997 ; 37 (2) : 137-143.
- 5) Gil E. The healing power of play. NY : The Guilford Press 1991. エリアナ・ギル著. 西澤 哲訳. 虐待を受けた子どもプレイセラピー. 東京:誠信書房, 1997.
- 6) 徳山美知代, 森田展彰. 児童養護施設における治療的養育の手段としてのグループアプローチ. 子どもの虐待とネグレクト 2007 ; 9 (3) : 362-372.

- 7) 武井 明. 子どもの芸術療法. 児童青年精神医学とその近接領域 2009 ; 50 (3) : 242-246.
- 8) 栗山貴久子. 小児心身症への対応. 杉山登志郎編. 子どもの心療科. 東京 : 講談社, 2009 : 106-119.
- 9) 厚生労働省. 児童養護施設入所児童等調査結果. 平成20年2月報告. 厚労省雇用均等・児童家庭局. Press Release 2009.
- 10) 三谷英子. 児童養護施設におけるアートワークを通じた支援—小学5年生の経過報告—. 教育研究 2012 ; 56 : 35-48.
- 11) 三谷英子, 磯崎祐介, 古荘純一. 児童養護施設におけるアートワークを通じた支援—小学4年生の経過報告—. 子どもの虐待とネグレクト 2012 ; 14 (2) : 247-257.
- 12) 飯森眞喜雄. 芸術療法の適応と注意点. 芸術療法. こころの科学, 92. 東京 : 日本評論社, 2000 : 24-30.
- 13) 中道芳美, 鮫島道和, 顧 寿智, 他. 絵画療法とその効果の唾液コルチゾールによる評価. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要 2006 ; 14 : 169-176.
- 14) Johnson JL, Berndts CA. The we can weekend. American Journal of Nursing 1986 ; 86 (2) : 164-166.
- 15) Burgess AW, Hartman CR. Children's Drawings. Child Abuse & Neglect 1993 ; 17 : 161-168.
- 16) 近藤千加子. 虐待を受けた子どものアートグループ. 子どもの虐待とネグレクト 2008 ; 10 (2) : 242-249.
- 17) 福山清蔵, 阿部恵一郎, 奥山眞紀子, 他. 児童福祉施設における自立支援のためのアセスメント作成の研究. 厚生労働科学研究費補助金 総合的プロジェクト研究分野 子ども家庭総合研究. 2002 : 679-692.
- 18) 青島朋子. 質問紙を活用した子どもの心のアセスメント—子どものメンタルヘルスを支える—教師編 自尊感情尺度. 児童心理 2008 ; 62 (9) : 129-135.
- 19) 嶋田洋徳, 鈴木伸一, 坂野雄二監修. 学校, 職場, 地域におけるストレスマネジメント実践マニュアル. 京都 : 北大路書房, 2004.
- 20) 國分久子, 飯野哲郎, 國分康孝監修. エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集. 東京 : 図書文化社, 1999.
- 21) 西澤 哲. トラウマが子どもに与える影響 : 虐待と心の傷. 教育と医学 2008 ; 5 : 4-14.
- 22) 近藤 卓. 自尊感情と共有体験の心理学—理論・測定・実践. 東京 : 金子書房, 2010.
- 23) 柴田玲子, 松崎くみ子, 根本芳子, 他. 日本における Kid-KINDL Questionnaire (小学生版 QOL 尺度) の検討. 日本小児科学会雑誌 2003 ; 107 : 1514-1520.
- 24) 古荘純一. 小中学生版 QOL 尺度からみた我が国の子どもの現状. 小児の精神と神経 2007 ; 47 : 233-244.
- 25) Bandura A. Self-efficacy : Toward a Unifying Theory of Behavioral change. Psychological review 1977 ; 84 (2) : 91-215.
- 26) 山田富美雄. ストレスマネジメント. 大野太郎編集代表. ストレスマネジメントフォキッズ 小学生用—ストレスを知り上手につきあうために. ストレスマネジメント教育実践研究会 (PGS) 編. 京都 : 東山書房, 2003 : 7-37.

[Summary]

This study considered that the art-work could enhance the resilience of children in elementary age group. As the effective evaluations, episode and behavior observation in group art-work activity, and questionnaires survey were conducted. We made comprehensive consideration of the internal factors of resilience, focusing ① interpersonal relationship, ② self-esteem, ③ self-efficacy, and ④ relief of stress. We confirmed positive changes, such as ① cultivation of trust relationship, ② growth of self-esteem, ③ manifestations of self-efficacy, and ④ relief of mental and physical conditions. Therefore, this study confirmed that the group support through art-work is effective in enhancing resilience.

[Key words]

resilience, art-work, group activity, children's home, elementary age